

あの日、あの時から6年…

15,893 人があの日… 2,554 の人が今もなお…。多くの死者や行方不明者たちに繋がる大勢の人たちが、あの日から刻んだ苦渋の時間に、私たちは思いをはせたい。せめて今日は…。

東日本大震災被災地応援実行委員会が発足してから5年と11ヶ月。

「私たちにできること」を「復興のその日まで」をモットーに続けてこられたのは他でもない被災者から届けられた「ことばの力」であった。中でも「忘れられることの怖さ」が綴られた手紙の数々は、私たちの「息の長い活動」の決意を確たるものにした。そしてこれからも、復興道半ばの「被災地の今」を見つめ応援し続けて行く。

3. 11 6年目企画「あの日を忘れない」

記憶が風化した時、被災者の心は癒されない

① 「あの日、あの時、あなたは何をしていましたか？」② 「あの日、あなたは何を思いましたか？」この問いを全校、全教職員に投げかけ書いてもらいました。あの日、あの時の記憶がよみがえってきます。

小学校入学前の中学1年生を除き、全校生が小学生でした。あの日、2時46分は、甚大な被害を受けた石巻市立大川小学校の児童と同じように、小学校にいた人がほとんどでした。「授業を受けていた」、「先生にしかられていた」、「グラウンドで鬼ごっこをしていた」、「校庭でジャガイモを植えていた」、「音楽室で先生を待っていた」、すでに「下校途中」、「家について塾へ行く準備中だった」、みんながみんな、いつもと同じ様な状態だったのでした。だから、「覚えていない」と言う人もいます。普段と同じ日、一瞬にして信じられない日になったのです。

「テレビを見て、頭が真っ白になった」「怖すぎて考えることができなくなった」「今現実に起こっているのかと目を疑った」「ただただ衝撃を受けた」「幼心に胸が痛くなった」「日本じゃないと思った」「自分の無力さに腹が立った」「涙が止まらなかった」「家族と一緒にいたいと思った」「ショックすぎて、どこかの国で起きたのだろうと思いました」「被災地にいる友達が心配でたまりませんでした」「一瞬にして何もかもがなくなることがあるんだと思った」「不思議な世界にみえた」私たちは、あの日、繰り返し、繰り返しテレビの画面に映し出される映像に恐怖を覚え、信じられない現実を受止めることができなかった記憶がありました。（生徒たちの記憶より）

あの日、あの時 教職員たちは…

- ① 水戸にいました。家族でたまたま安全な場所（偕楽園）にいたので良かったですが、もし園内の建物の中にいたら大変だったと思います。生まれて初めて地鳴というものを聞きました。「ザー」と海の波のような音です。
- ② ひと晩は避難所で過ごしました。道に出てふと夜空を見たとき、災害で真っ暗になった町の上で星々だけは逆にかえって鮮やかに輝いているのが妙に印象的でした。

望月 宝・里美 先生

①教員室にいて仕事をしていた。地震のことを知り、インターネットでその大きさを見て大変なことになると思った。すぐに体育教官室へ行き、テレビをつけて津波が来る様子をリアルタイムで見た。

インドネシアの大津波の映像と重なり、大変なことになると思った。

③ 津波に巻きこまれていく人（まだ映像を見ていないとき）を想像して、どうしようもないものに巻きこまれていく状態を考えていた。津波のみならず、地震の震度も大きかったのですぐ実家にも連絡したが3日間も連絡取れず心配していた。

岩間 徹 先生

① 当時大学1年生でした。学校が春休みに入り、仲の良いバイト仲間数人と夜行バスに乗ってディズニーランドに出発する予定だったのが、6年前の3月11日です。家で荷物をつめて、あとは出発の時間を待つだけという状況での出来事、最初はテレビをつけても通常のような地震情報だったのがみるみるうちに「ただごとではない」報道にかわっていたのを覚えています。

② 恥ずかしいことに、地震が起こったばかりのときは「夜行バスちゃんと走るかなあ」「アトラクションとか大丈夫かなあ」と自分たちの旅行の心配ばかりしていたように思います。が、被害がどんどん増えるのをテレビの前で見ているうちにそんなことを言ってる場合じゃない、とやっと気付きました。

一方で、やはりテレビで見ているだけでは現実感がわききっていないような、なんだか不思議な感覚だったと思います。

吉島 未来 先生

① 中学3年生の卒業を祝う会の中で、ギターを弾き語っている最中でした。保護者の方々が口々に軽い揺れを感じなかったかとおっしゃっていたので、はじめは地震だともほとんど思っていなかったくらいでした。

② テレビで報道された東北など被害を受けている映像が、この日本で現実起こったことだとはなかなか思えませんでした。自然の脅威と人の無力さ、そして被害に遭われた方々のこと、ぐるぐると頭の中を巡っていました。しかしやはり、小さな子どもを失った親、親を失った子どもを思うと、やりきれない思いで一杯でした。

木田 巧 先生

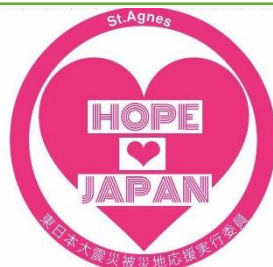
卒業生が思いを伝えるグッズ作成しました！

6年目を迎えた今日、高校3年実行委員が「あの日を忘れない」ためにとの願いを込めて制作したオリジナルロゴの入った文具を販売します。購入していただいた文具をお手元においていただくことが「被災地を忘れない」ことにつながります。もちろん売上金のすべては被災地へのプレゼント購入費用にします。みなさまのご協力をお願いします。



インクペン 1本 150 円

色はスクール杆の紫
オレンジ・ブルー・ピンク



付箋 1ヶ 200 円